

Steel Landscape

鉄の点景



1800年代後半のものと
言われる英国製ルアー。

魚と知恵比べのテクニック

ルアー

今、若者の間で釣りがブームである。もっとも釣りは釣りでも、擬似餌を使うルアー・フィッシングのことだが、そのブームはかなりのものである。今をと きめくキムタクこと木村拓哉をはじめ、芸能人・ミュージシャンなど、有名人の間でもルアー愛好者は増加しているし、釣り具メーカーなども大々的に TVCMを放映しているほどなのである。

このように、文字通り(lure＝「誘惑する、惹きつける」)たくさんの若者を魅了しているルアーとはいかなるものなのか。素材との関係を整理しつつ、概略的に触れてみることにする。

スポーツ感覚の釣り

疑似餌を使う漁法は古くから世界のどこにも存在した。日本でもツノヤバケ等と呼ばれる漁具も見られたが、魚を生業とする者の間で使用されたに留まった。

現在の形のルアー・フィッシングは300年ほど昔、ヨーロッパのとある湖畔で、食事をしていた人が水中に落としたスプーンへ魚が襲いかかったことに起源を持つという。肉食性で攻撃的な魚は、身の回りに現れたものなら、全く餌に見えないスプーンのようなものにさえ、正体を見定める前にとりあえず食いつく反射食いと呼ばれる習性がある。そこへ小魚や虫などこうした魚の獲物に似せたルアーを投入し上手の手でいかにもそれらしいアクションをつける。さらに音や匂いで魚を引き寄せる仕掛けのものもある。あの手この手の魚との知恵比べ。これがル

アー・フィッシングである。

この種の魚はイワナ、ヤマメの渓流魚、ブラウントラウト、ブラックバス、ブルーギルなどの湖沼の魚、スズキ、カサゴ、メバルなどの海に棲む魚に至るまで、種類も生息域もさまざまな種類があり、これらを対象としてルアー・フィッシングは発達してきた。それだけに東洋風の自然と対話を楽しむ太公望スタイルの釣りとは大違いで、動きの激しいスポーツに近い感覚の釣りである。

このルアー・フィッシングやトロリングのようなダイナミックなスタイルの釣りの登場が、魚を釣って食用に供するのを目的にするのではなく、魚との駆け引き、ファイトを楽しみ、釣った後はリリースしてしまう近代スポーツ・フィッシングを生んだのであろう。

ルアー・フィッシングの道具立ては、ざっと次のようなもの

である。

- 1. ルアー 4. ライン
- 2. リール 5. フック
- 3. ロッド

横文字ばかりで凝った仕掛のようなだが、リールを除き、実は上から疑似餌、竿、釣り糸、釣り針という他愛もない意味である。古代からの人間の生活の知恵の1つであった釣り具にそう大きな違いがあるはずもなく、要素や原理は世界のどこでも似たり寄ったりなのである。

ユニークなルアーの世界

とはいえ、名に因むルアーはかなりユニークなものではある。ルアーの形状は、大きく分けて次のように分類される。ルアーの原点ともいべきスプーン型、中心にあるシャフトの周りを羽根の形をしたブレイドが回転するスピナー型、小魚に似せて作られるプラグ型、重みを活かして湖底等に生息するターゲットを狙うジグ型である。(この他にもプラスチック製のもの、複合している形状のものなどもあるが、煩雑となるので本号では上記の分類とする。)

この中で金属を使うのは、ルアーの原形ともなったスプーン型である。素材を卵型や涙滴型といった形状にし、ボディの部分にカーブをつける。この形状・カーブの度合いによって、ルアーの動きを大きく変えることもできる。速い回転を必要とするならば卵型を選択すればいいし、大きな動きが欲しければ曲げの角度を大きくすればよいのだ。素材としては真鍮や銅、銀などがしばしば使用される。

またスピナーのブレード部分にも金属が使用されている。羽根が回る時に生じる輝きと水音で魚の注意を引くため、ここでも金属素材は重要な役割を担っている。ブレードは光の輝きが重要であると同時に耐食性も求められるため、市販のモデルなどは金・銀などのめっきを施した素材を使用する。またジグのなかでもメタル・ジグと呼ばれるルアーにおいては、重みを出すために、鉛や真鍮、ステンレスなども使用されている。

このようにルアーの形状は様々であり、使用される素材もその用途において変わってくる。

メタルのぬくもり

さてルアーにはフックがついている。フックには錨の形をした3本針のトレブルフック、2本針のダブルフック、ソフトベイト



歳月と共にメタルのぬくもりを増すルアー。塗装がはがれかかった3cmほどの中空のボディには、数十年にわたる魚との知恵比べの歴史が克明に刻まれている。長い年月の間に数々の魚達を翻弄し続けたその佇まいには、そこはかとない愛敬すら漂う(写真はNZ製のルアー)。

(ビニール素材等でザリガニや虫をかたどった疑似餌)用の1本針のワームフックがある。1本の針の構造は、アイと呼ばれるラインの取付け部、シャンク(軸)、ケイブ(ふところ)、ベント(曲がり)、ポイント(針先)、パーブ(返し)となっていて、基本的に普通の釣り針と違いはない。返しのないものがある点も同じだが、ワームフックに針掛りを確実にするオフセットフックがあるのは、ルアー独自の点である。

釣り針の材料としては、日本では古来、鉄、銅、真鍮、銅の4種が用いられてきた。ほとんどのものは鉄製であったが、海洋の大型物を釣る場合には特に銅製のものが選ばれた。この銅製の針は刃物鍛冶に近い感覚で、銅片から形を槌で打ち出し、焼入れして仕上げていた。現在では、普通鋼線材を冷間引き抜きした材料を機械加工して素型をつくり、細かいところは手加工で仕上げていく。ルアーフックも動きが速く力の強い魚が相手なので最初から銅製が使われてきた。ルアー・フィッシャーは、フックの先端を料理人が包丁を研ぐように、理容師がかみそりを研ぐようにオイルストーンで常に磨いている。ルアーの本場では、自宅に作業所を持っていて、フックまで手づくりを楽しむ人もいます。

このように魚だけではなく、人々まで魅了し続けるルアー。その秘密はメタリックな輝きにどこことなく手作業のぬくもりを感じるからかもしれない。

[取材協力: 社団法人日本釣用品工業会、東京釣具博物館、マミア・オーピー(株)]